正月返上の受験生諸君へ　北の海（あの人にこの一冊）　【名古屋】

夕刊編集部から

＊

受験生のみなさんは、正月休みも返上し、睡眠時間も削って机に向かったことでしょう。でも、勉強のやりすぎは体に毒です。息抜きにお薦めしたいのがこの本。失敗を恐れず、おおらかな気持ちで試験にのぞめるかもしれません。

大正十五年、主人公の洪作が旧制高校の受験に失敗し、静岡県沼津市で浪人生活を始めた四月から物語は始まります。浪人生活といっても、ちっとも勉強なんかしません。母校の旧制中学の柔道場にＯＢとして練習に通い、留年生らと遊び暮らします。そのうち、金沢にある四高の柔道部に勧誘されます。

洪作は柔道部入部のためだけに、四高受験を決意します。そして下見もかねて金沢に出掛けます。数日で帰る予定だったのですが、柔道部の夏季練習に参加し、結局、夏の終わりまで練習につき合ってしまいます。この間、参考書を開くことは一切ありません。練習しては食べて寝る。その繰り返しです。

洪作はそこでもっと上手の浪人生に出会います。やはり柔道部志望で、金沢に下宿し練習しながら受験に備える男です。名前は大天井。四回受験に失敗していますが、悲壮感はありません。現役の四高生は大天井をさんづけで呼び、大天井は四高生を呼び捨てです。

大天井は洪作に受験勉強を促されると、「おれの方は黙っていてもはいれる。来年あたりはそろそろおれの知っていることばかり出る年が回ってくる番だ」と一笑します。あくせくしても仕方ない。男はやっぱり大きく構えていたいものだな、と思います。

そして秋。洪作は受験に備えるため、台湾の親元に出発し、物語は終わります。井上靖の自伝的三部作で、「しろばんば」「夏草冬涛（なみ）」に続く作ですが、「北の海」だけでも十分理解できます。

洪作や大天井のようでは、いまの受験戦争に勝ち抜けないかもしれません。でも、入試なんて、長い人生ではひとつの通過点です。せめて、おおらかな気持ちでのぞめるよう、この本で、頭を柔らかくしてはいかがでしょうか。

（中村尚徳）

＊

井上靖著。新潮文庫。６７５ページ。本体価格７３８円。